

# 一九一五年のカール・バルト

浜辺 達男

カール・バルト全集の一冊として、『一九一五年説教』<sup>(1)</sup>が一九九六年に出版され、今まで『バルトトウルナイゼン往復書簡』<sup>(2)</sup>によって知り得た事柄の多くが、説教をめぐる話題であったため、この説教集出版によって、これまでは闇の中であったことが明らかになった。この全集の二冊によって、一九一五年の時点で、バルトに何が起こったのかを出来るだけ詳細に探求してみたい。一九八一年に世に出た『マルティン・ラーデとの書簡集』<sup>(3)</sup> その他『クッター書簡集』<sup>(4)</sup>『ラガーツ書簡集』<sup>(5)</sup>とともに既にこれらの『書簡集』によって知りえた事柄を、新資料『一九一五年説教』によって、更に詳細に補完し、確認する手続きにより真相に迫りたい。

## 1 課題としての「新しい世界」

カール・バルトにとって一九一五年は、マルティン・ラーデの訪問から始まった。ドイツ、マールブルグ神学部教授であるラーデは、バルトがマールブルグで学んだ一九〇八年から十ヵ月間『キリスト教世界』の編集助手として世話になって以来の付き合いである。一九一四年八月第一次世界大戦開始以来同誌の論文に対してラーデに抗議の手紙を送り、当時最も交流のあった恩師であった。ラーデがドイツ人として中立国スイスにわざわざ出向いているのには、それなりの理由があった。最も大きなものとしてバルトとの直接対話が動機であったことは確かで、次の手紙が残されている。前年一九一四年十一月二十三日のラーデ宛の手紙には、バルトからの次の提案があった。<sup>(6)</sup>

もしわたしたちがこれらの全てのことを語る事が出来たならばと思います。わたしは春の来るのを喜んで待っています。春にはわたしたちは喜んでお会いできるでしょう。

これは一九一五年四月に予定されている弟ペーターの結婚式を考えての発言であった、と思われるが、ラーデは直接的に受けとめて、次のような日程を予告している。

あなたの親しい手紙に、わたしは口頭でお答えしたい。あなたは一月四日にパーゼルに来れますか。わたしはペーターに、数名の人々をそこに集めるように依頼しました。その時あなたも同席しては、と思っています。<sup>(7)</sup>

ラーデはベルンで、スイス宗教社会派神学者との意見交換をするために一月三日から五日までスイスに滞在した。その間にバルト宅をザーヘンヴィルまで訪問をしている。四日・五日に一泊している。バルトは友人トゥルナイゼンとの間ではラーデ祭り (Rade-Fest) と称していた。

一月十日 マルコ福音書一章十四節十五節にもとづく説教<sup>(8)</sup> この説教はラーデの訪問を受け、彼のドイツ側の協力要請に対抗し、今迄の思想と違う「新しい世界」を強調する。

「(戦争と言う) 審判はわたしたちのキリスト教だけに降されたのではない。同様に全ての努力と運動に対しても降されたのである。あらゆる努力と運動は人間性と進歩と自由の名において人間たちを追い込んできたのであった」。「わたしたちは全てのこの運動と党派活動をこの進歩というしるしの下で奨めてきたのであった」。「悔い改めるといことは神によって方向転換させられることである」。「新しい世界はそこにある」。

一月二十日 バルト発信トゥルナイゼン宛<sup>(9)</sup> これは新しい年を迎えた初の手紙である。

「突然あらわれたインフルエンザ」のため、一月十七日の説教を、補助者が「東方からの博士たち」と題して、担当したことを告げている。この二十日の手紙には、妻がベルンに出掛け未だ帰ってこないで、「数日間沈黙を続けなければならない」、とある。

(インフルエンザで) ちょっと具合が悪いのも、それなりの良さがあります。具合が悪いのがなお続いて、心痛と後悔なしに、その良いところに留まっています。

トゥルナイゼンに聞いて欲しいと言い、「ラーデ祭り」の印象はどんなであったかを問いつけ、バルト自身は「ラーデはあの晩拙宅に泊まってなお語り続けた」と報じ、一月十日の説教では「予言者の言葉に満ちた説教を展開しました」と、反面教師としてのラーデの存在を告げている。その中で特記すべき事柄は、「新しい世界」という表現であろう。

イエス・キリストにあって、私たちは今迄の世界と今迄の人間が裁かれ、克服されたのを認識する。同時にイエス・キリストにあって、新しい世界へと踏みだし、新しい人間が私たちの生の中で体験できる真理へと、侵入して来ているのを認識する。

さらにこの二十日の手紙の最後に、次のような詩形の文章が数行書き添えられてある。

穏やかに葉巻煙草が煙を出している／鳩時計が十時半を告げている 静かだ！／  
牧師先生は、明日が世界審判である、と勉強中。

この詩文は何を伝えようとしているのだろうか。この二月一日にバルトがスイス社会民主党に入党することと無関係ではないであろう、と推測する。

二月五日 トゥルナイゼン宛の手紙で「私は社会民主党に入党しています」と告げ、更に党员として「十四日にはツォフィンゲン文化センターで講演します」とも伝えている<sup>(10)</sup>。この日は聖日で午前ザーヘンヴィルで「神の前衛」と題して説教を担当し、午後二時には隣り町ツォフィンゲンにあって講演「戦争、社会主義とキリスト教」を担当している。

説教において「神の前衛」としての「少数者」を前面に出して、「彼ら少数者は内的には勝利している。なぜなら、彼らにあって新しい世界が始まったからであり、彼らにとってまさに一人のイエス・キリストなる方が、すぐ傍らに正しい親しい先生として歩み寄り、この方によって、彼らに別の人生が不思議に開き始めたからである」と述べている。

講演では「一人の真実の社会主義者はキリスト者でなければならない。そして真実のキリスト者は社会主義者でなければならない」<sup>(11)</sup>と、印象深く語ったのがこの日であった。

## 2 クッター開眼

二月二十八日（レント）から四月二日（受難日）まで

イザヤ書五十二章十三節から五十三章十二節をテキストに、「苦難の僕」を主題にし、六回連続して説教している。<sup>(12)</sup> このレントから受難日に及ぶ四十日間に、様々な意見と、その反論が展開、発展、変化が生じることとなる。三月八日のバルト発信のトゥルナイゼン宛の手紙には、親しい友人トゥルナイゼンに対し、激しい反論・批判が記されている。

二月二十八日の夕べ、ザーヘンヴィルの青い十字架協会主催による集会において、トゥルナイゼンが講演を担当した。題は「脇道 (Seitenwege)」である。この題名にトゥルナイゼンの意図、即ちラガーツへの反発と、クッターへの共鳴が明瞭に出ていると思われる。何故なら、ラガーツ編集のスイス宗教社会派の機関誌は、『新しい道 (Neue Wege)』であるからである。この講演の原稿はないが、三月八日付けのバルトの手紙はこの講演に対する反論・批判を展開し、大体の様子を報せてくれている。<sup>(13)</sup>

『新しい道』について、わたしに警告したことの償いの罰として、この件全体について君本来の考えを、直ぐに素晴らしい論文にして書くべきです。

これは明らかに、一九一四年十月に『新しい道』誌上に、バルトとラーデの往復書簡が掲載されてから、バルトがラガーツの路線を疾走しているのを、友人トゥルナイゼンが批評する意図が根底にあった講演である。バルト宛にラガーツの手紙が一九一四年十二月十五日に来ており、トゥルナイゼン宛に十月十九日付けでクッターからの手紙が来ている。

それぞれ親愛の情を告げている。バルトは更に二月十五日付けのラガーツからの手紙に<sup>(14)</sup>

敬愛する牧師殿 あなたの説教は私にはとても歓迎すべきもので、わたしの共同経営者

《Konpagnons》であることは確かです。わたしたちは間もなく出版する四月号に載せるように設定することが出来るでしょう。

と。これは『神の前衛』と題する二月十四日にされた、説教の掲載に関することである。

三月九日のバルトの批判に対するトゥルナイゼンの反論の返事があるが、この時の両者の討論が、思いがけない結論に直面することとなる。その経過を告げるのは、三月十八日にバルトが発信した、トゥルナイゼン宛の次の手紙である。<sup>(15)</sup> その手紙直前に別の手紙、即ち、トゥルナイゼンへの挑戦的な手紙を出した直後、バルトはクッター宛に発信していた。それはクッターの『Ich kann mir nicht helfen』とのパンフレットを読んだ直後、クッターの主張に賛成することをバルトが伝えたものであった。この手紙そのものは紛失しているが、同時にトゥルナイゼン宛に出した手紙があり、<sup>(16)</sup> それによって趣旨は伝わるとともに、クッターからの感謝の手紙があることから、この経過についてのバルトの精神的軌跡は間違いないものと思われる。<sup>(17)</sup>

このクッターの小冊子 “Ich kann mir nicht helfen” <sup>(18)</sup> が、何をバルトに告げたのか、「観念のパリサイ主義」(Pharisäismus der Idee) との一句に要点を捉えたい。

不幸なことに、わたし(クッター)が『観念のパリサイ主義』との一句で刻印付けたい異物(einer andern)にわたしたちは屈してしまっている。

ユダヤ教がますます単なる律法主義に固執し、単なる律法収集に有利になるために、信念と生活から生ける神を削除してしまったように、キリスト教もまたイエス・キリストに啓示された神の生命を単なる言葉の下に埋てしまった。ここに律法。あそこに律法。あそこにユダヤ教の教理。ここにキリスト教の教理。生きている真理は何処にも見当たらない。ただ有るのは諸観念のみ。ユダヤ教的観念とキリスト教的観念だけである。福音全体は唯一の主(なる神)の観念であり、福音の生きている各部の真理全てが同様に多くの諸観念である。例えば、恵みの観念とか、わたしたちが今かくも深く関心を寄せている平和の観念をわたしは思い起している。しかしこれらもまさに観念に過ぎない。生きている、創造的な背景を欠いている諸観念は、もう現実性ではなく、ただの要請に過ぎない。

それはもはや神の生命に満ちた生き生きした樹木から育ったものではなく、いわば乾いてしまって丁寧に貼り付けられた植物標本の花(“Herbariumsblüten”)となっていて、見かけでは本当の花と較べられる。しかし内部では死んでしまっている。ユダヤ人に向かって「あなたは識る型式を持ち、律法にあっては正しい」(ローマ書二章)とサウロが語っている通りである。本来自立的な根の力を保つのでなければ、何らの諸観念は存続しない。樹木に咲く花はそれ自身で育つことはない。全ての諸観念は基本的に汲み尽くすことのない神の生命の貯

えられた表現形式に他ならない。生命こそ全てだ!

神こそ観念の本質であり、愛であり、正義であり、平和であり、一致である。神の他に愛はなく、神の他に正義はない。神自身が平和でなければ、真実の平和はない。平和とは人間の只中にいます神固有の霊の力以外には有り得ない。

スイス宗教社会派は、ただ単なる党の言葉だけに執着すべきでないならば、そしてわたしたちはあらゆる事柄を前にして、長い間静かになり、人間によるのではなく、また人を通してではなく、ただ神御自身からだけ来るものをじっと待ち望むことを指示してきたことは、常にわたしたちの下に与えられていたのである。

ここにクッターの基本姿勢があり、その姿勢に共鳴することが「クッター開眼」である。

一九一五年三月十八日にクッター宛に手紙を出したのち、バルトはどのような説教を書き記しているかを検証したい。三月二十一日 イザヤ書五十三章五節六節にとる説教<sup>(19)</sup>

今世界戦争にあって再びキリストの十字架が驚くほど大きくはっきりと真っすぐに立つ時、神の使者が、この使者を受け入れない世界の只中にあって、再び沈黙しなければならない時、イエスが何千、何万のイエスの兄弟たちの中で、再び血を流し、苦しみ、死なければならない時、その罪はわたしたちにあるのだ。

今かしこで苦しまなければならないわたしたちの兄弟たちは、イエスの兄弟たちであるのに、わたしたちはそれに応じようとはしなかった。(マタイ福音書、23、37)。

三月二十二日のバルト発信のトゥルナイゼン宛の手紙<sup>(20)</sup>に、『新しい道』三／四月号に掲載予定のバルトの説教『神の前衛』のゲラ刷りが添えられている。

三月二十八日 イザヤ書五十三章七節一九節による説教<sup>(21)</sup>

キリストの十字架にある神の勝利について、わたしたちは今日聞きたいと思う。

最も謎に満ちた、最も偉大なことは、イエスが無防備であることである。キリストの十字架における、神の勝利の秘密はかくも大きいことを見よ。

しかしわたしたちははっきりと言いたい。イエスは何かを行なう、イエスは実際的な真剣な行為が何であるかを知っていた。なぜなら、神が誰であり、神が霊であることを知っていたからである。神こそ源泉から流れ出る霊的な生命であることを知っていた。

四月二日午前（受難日）イザヤ書五十三章十節—十二節による説教<sup>(22)</sup>

受難日は勝利の日、喜びの日である。わたしが前年までの受難日説教により、あなたたちを暗い悲しい日とするよう誘導してきたことを、わたしはあなたたちに告白しなければならぬ。わたしは今もうイエスの死について、昨年迄のように語る事が出来ないことを考えてほしい。そしてもしわたしがたまたま、困難と悲劇的なことをあなたたちに印象強く残るように、それについて語ったとしても、その場合でも、わたしの意図ではなく、それから自由になりたい。

いかに受難日と復活日が緊密に結びついており、それ故に受難日そのものが正しく理解するならば喜びの日であるか、この受難日にわたしたちは神の愛以外のなにものも語るべきではないものであることが、今わたしにはとてもはっきりしてきたのである。

不死と永遠の生命を、殉教者・釘付けられた者・苦痛と恥の人が、持っているのだ。

悪の権力からキリストはその強さを取り上げ、その悪の権力を神に役立てる。何故なら悪の権力がキリストにその力を発揮し、思う存分許した後で、キリストは彼らに勝利して、彼らから悪魔のような心を奪い取ってしまったのだから。偽善者と卑怯者と個性のない者、金銭主義者、武断主義者、誠意のない者と馬鹿者たち、彼らの罪をキリストは負い給う。神の僕は新しい人間を創り出した。わたしたちはゴルゴダの上で古い世界を超えて勝利したこの新しい人を信じたくないのか。

信仰と愛と希望、忍耐と代祷と待望を見よ。全てが神から今かくも鮮やかにわたしたちの魂に完全に閃いている。その結果、わたしたちは率直に神なしの、わたしたちの今迄の生活に留まっていることは出来ない。わたしたちが何の喜びも、満足もなく生きてきた今までの存在に留まっていることは出来ない。苦難と不正にかくも満ちている今までのわたしたちの世界に留まっていることは出来ない。

ヨーロッパ戦争と数えきれない戦争犠牲者が、最もはっきりと、わたしたちの社会的、国家的関係の間違った行動を白日の下に引き出したところで、そこで神の国の福音が全く違った形で光り始めたのである。

何故わたしたちがこのことが深い静かな喜びをもって満たされなければならないのかを今あなたたちは理解した。何がゴルゴダで起こったのか、何が今諸国民の痛ましい苦難に起こったのかを、今あなたたちは理解した。そこでは悪の終わり、古い人間と古い世界が終わり、新しい世界が始まっている。そしてこの素晴らしい善きものが、イエスにあってわたしたち

に啓示されることが出来る。何故ならイエスは神の愛によって遂行し給うからである。何者もわたしたちを妨げることは出来ないし、神が与えるものから、わたしたちを引き離す者は誰もいないからである。

四月二日午後（信仰告白式） ヨハネ福音書十六章二十七節にもとづく説教<sup>(23)</sup>

父はあなたたちを愛し給う！ あなたたちは今二年間の信仰告白授業に励んできた。もしあなたたちが何よりも、わたしたちと一緒に語ってきたものを、一つの文にまとめてみたいと思うならば、『父はあなたたちを愛し給う』の一句で十分である。

イエスは苦痛を通しても、イエスはわたしたちを愛していると語るのである。そのことは特別なことではなく、キリストの十字架の前にわたしたちに全く明らかになったのである。今君はイエスとの共働者であり共闘者であることが許されているのに注目しなさい。

四月四日（復活祭）コリント人への手紙前、十五章二十五節二十六節にもとづく説教<sup>(24)</sup>

キリストは悲しむな！とはあなたに語らない。それはあなたには全然助けにならない。しかしキリストはあなたに、あなたの人生における本来的な力としての生ける神を示し給う。

最初に人間たちが生命、神の生命が死を克服したと言う、はっきりとした、決まった、覆すことの出来ない経験を味わった、と十分に言いたいならば、この人たちこそイエスの弟子たちであったのだ。

キリストの声をあなたは聞いた。そしてその声はあなたに、父はあなたたちを愛し給うと、語った。

イエスは死んだにも拘らず生きているのではなく、死んだが故に世界の罪を負って、神の小羊として死に、最後まで神の旗を高く掲げた神の英雄として死んだが故に、まさにそれ故に最も力強い最も徹底した証を、死ぬ筈のない、生きている神によって重大な事業を果たしたのである。あなたの救済者解放者は、まさに釘打たれ殉教した神の僕であり給う。

イエスは聖餐式で再びわたしたちのところに來たり給い、『全ての重荷を負って苦しんでいる者はわたしのところに來なさい』と、親しく招きの声を掛けて下さる。イエスはこの大きな真剣な戦争の時にあって、わたしたちの心の戸を力強く叩き給う。

### 3 「平和」論執筆

戦時下のドイツをトゥルナイゼンと旅行する。フリードリッヒ・ナウマンに会い、当時のドイツ戦争神学を直接に学習した後、クリストフ・ブルームハルトに面接し、クッターから学んだものに一層信頼を寄せる時期をむかえた。スイスに帰って最初に書いた手紙は、留守の間にドイツから送られたヴィルヘルム・ヘルマンの戦争協力文書に対する、反論の返事であった。戦争に狂気するドイツの恩師・親戚に囲まれた中であって、「平和」論を書くことは、当時の時代状況を反映した、新しい視点が要求されたはずである。

四月九日 マールブルグにおけるペーター・バルトの結婚式

復活祭後の休暇を利用してドイツ・マールブルグにトゥルナイゼンと共に旅行をしている。この結婚式で、花嫁の父ラーデに再会し、花嫁の伯父フリードリッヒ・ナウマンに会う。四月十日から十五日まで、バード・ボルにクリストフ・ブルームハルトを尋ねる。四月十五日から十七日まで、チューリッヒのキスリング家を訪問、さらにベルンに寄り二十日にザーヘンヴィルに帰る。その翌日バルトは机に向い留守中の来信への返事を書いた。

四月二十一日にマールブルグのヴィルヘルム・ヘルマン宛の返事をバルトは書いている。

わたしたちは強い印象を受けてドイツから戻ってきました。その中でわたしが最も強く受け取ったのは、フリードリッヒ・ナウマンとボルにいるクリストフ・ブルームハルトの信仰についての印象でした。ナウマンからブルームハルトへと導く細い線 (die feine Linie)、この線上でならば、あなたとわたしたちが今後再びもう一度お会いすることが出来るでしょう。しかしこの道を歩んで行くのは、遠く且つ暗いのです。<sup>(25)</sup>

翌日の四月二十二日の手紙で<sup>(26)</sup>バルトはトゥルナイゼンと別れたのち、チューリッヒ、ベルンを経て、二十日か二十一日に帰ったことを告げている。この手紙には精神的な転機を告げるものが記されていた。「落日を両足の間から見ることはしたくありません」<sup>(27)</sup>との意味不明の一行である。その謎を解くならばザーヘンヴィルを留守にしている間にマールブルグのヴィルヘルム・ヘルマンから、戦争肯定の印刷物が届いており、そこにはラーデやナウマンと同意見の戦意高揚文が述べられていた。「落日 Sonnenuntergang」と比喻でバルトが述べるのは、ヘルマンを代表とするマールブルグ全体との決別を表わしていると見ても良いのではないかと、思う。

五月十四日のバルト発信のトゥルナイゼン宛の手紙には、チューリッヒYMCAの機関誌『Glocke 鐘」<sup>(28)</sup>六月号に掲載する「平和」と題する文章を書き上げたことを伝えている。ここ



でバルトが取り組んでいるのは、今までのラガーツの線から離れて、クッターの言う「観念のパリサイ主義」をどのように避けるかという課題であった。先ずバルトは基調主題として、「わたしたち自身が不和の世界の只中にある」と告白することから始める。(29)

(戦争という)より高い必然性が、全ての人を支配しているかのように見え、誰もこれから逃れることは出来ないかのように思える。

不和の地上には平和はない。この地上には我慢と対立、抗議と討議、怠慢な沈黙、頭を横に振る意見対立、戦争、戦場の叫び、ベルギーとルーシタニア号とイタリヤの政治などなど、より高度な必然性と全ての説教、確信の爆発と敬虔な願望をもってしても、これを変えることは出来ないであろう (...werden daran nichts ändern)。

このより高い必然性を超えて、最高の必然性が到来している。神が平和である。神は党派ではない (Bis über die höhere eine höchst Notwendigkeit kommt. Gott ist der Friede. Gott ist keine Partei.)。

神は全能にもかかわらず、わたしたちが争いに罪責を与える個性とか、洞察とか、意志とか、力という、哀れな人間がする全く異物に満たされているのをご存じである。神は愛するだけである (Gott liebt nur.)。わたしがわたしであることが許され、汝が汝であることが許され、ドイツ人がドイツ人であることが許され、イギリス人がイギリス人であることが許され、パウロがパウロであり、ペテロがペテロであることが許されている。そしてわたしたちの多様性の調和は、諸民族を超え、頭脳を超え、心を超えた最高の必然性なのである。この最高の必然性はわたしたち各自に本来的に期待し、イエスにあって、二千年前からわたしたちの認知を待っている。

神が平和であるゆえに、平和は生命の真理である (Der Friede ist die Wahrheit des Lebens, weil Gott der Friede ist.)。

(観念のパリサイ主義の言う)「平和」を待つのではない。そうではなくて、かの最高の必然性が私たち全員に特別に迫っており、神が真実にその生命と交わりの霊を私たち全員の肉に注ぎ掛け、わたしたちが神に父を認知し、相互に兄弟を認知することを、待っておられる。

(神にある) 地上の平和が設けられなければならない。その上であって、はじめて平和が成長することが出来る。諸民族の平和、正しい者と不正の者の間の平和、あなたの中にある光とわたしの中にある光の間の平和、スイス人の家庭における平和と国境を隔てた者との平和、ザーヘンヴィルの平和とチューリッヒの平和という平和が成立する。

この論文「平和」こそ、バルトがクッターによって触発された「新しい世界」を志向する最初の証拠文書である。「生ける神」「愛する神」によってだけ、今会話不能となったドイツ人との交渉の接点を見いだしたものと考えられる。地上の「不和」を越えた存在としての最高の必然性としての、新しい「神」を見いだすことによって、道が開かれる。

五月二十五日のバルト発信のトゥルナイゼン宛の手紙<sup>(30)</sup>には教会員に関する感想が述べられている。新しい視点を発見したバルトではあるが、当時常識的であった従来の考え方から、人々が直ぐにバルトの意見に同調するわけではなく、そこにこれ以後のバルトの戦いが始まる。説教の聴衆のザーヘンヴィルの教会員に対するバルトの感想が述べられている。

わたしたちがこの必然性の下にあり、わたしたちの（説教の）創作が機械的に作られているのではないことが、何故に教会員は気が付かないのであろうか。

ラガーツを中心とするスイス宗教社会主義者の論調に対するバルトの感想も変化する。

その最良の価値と約束と一緒に、ドイツ国家が失われなければならないかのような観察方法は、わたしには異様に見える。

#### 4 説教をめぐる討論集会

ザーヘンヴィルの教会員に対して、自らの変化を伝える手段として最初にとった姿勢がテーマ説教の実施であった。バルトの方から仕掛けたこの企画はやがて教会員の反発を呼び出し、今までの教会生活に対する疑問と攻撃を繰り返す、激しいものであった、と言わなければならないであろう。バルトにとってはこの一年間は学ぶものに満ちたものであったが、村人にとっては、牧師程に受け取るすべのない、平穏な日常生活の中にある一年であったに違いない。次々と変化が起こる様子を伝えているのが、六月二日以降の、バルトからのトゥルナイゼン宛の手紙<sup>(31)</sup>である。

今度の日曜日、わたしは良心について語りたいと思う。

六月八日には、マルティン・ラーデ発信のバルト宛の手紙<sup>(32)</sup>には、先のゲラ刷りであった『Glocke 鐘』掲載のバルトの論文「平和」を、バルトが送付したことに対する、感謝が述べられている。しかし一部賛成であるが、ドイツ人の立場から反論を繰り返している。

六月六日から六月十七日まで連続するテーマ説教<sup>(33)</sup>。

六月に入り、六日、二十日、二十七日に及ぶ、「良心」「律法」「自由」との連続テーマに基づく説教が語られることになる。教会員の反発をめぐる説教に関する討論会が開かれることに

なった。これには討論集会のためのレジュメが残されている。

この間の様子を、六月十四日のバルト発信のトゥルナイゼン宛の手紙は伝えてくれる。(34)

「養育係」(律法)については、まだ説教できなかつたし、「キリストは律法の呪いからわたしたちを解き放った」(ガラテヤ三章十三節)を取り上げた原稿をわたしは金曜日に見ました。(その原稿が)余りにも理論的になってしまっているのに気が付きました。その時、君が言うべきだと何時も言っているように、愛の神が介入してきた。

この時七月七日にテーマ説教に関するザーヘンヴィルの牧師信徒の討論集会が持たれた。「新しい世界」の始まりを意識して踏みだした一步が、教会員の反発を招き、更に発展して討論集会を開くまでに至り、バルト夫妻は心からの喜びの声を挙げていたのが、七月五日のトゥルナイゼン宛の手紙(35)で、窺うことが出来る。

先週(六月二七日)のわたしの説教は聴衆の反対を引き起こしました。わたしが『この世から逃げている』との重大な非難の声を、或る利発な家具職人がわたしに向かって挙げました。今や不満を抱くもの全員を水曜日の夕べに、(牧師館の)林檎の木の下に召集しました。

この討論集会の様子を、七月八日発信のバルトのトゥルナイゼンの手紙は報じている。(36)

昨晩の説教討論集会の夕べには、五人の男性と、四人の女性が揃いました。妻ネリーは彼らを歓迎し、激励していました。わたしは今迄聞かされたことに憂鬱になったのですが…

今日追い打ちを掛けるように、教会役員会議長は、彼と数人が、わたしがドイツから帰ってから、わたしの説教が特に難しくなったと受けとめている、と言うのです。

四月中旬にドイツのマールブルグとバード・ボルを訪問した時に、バルトは戦時下のドイツを見聞し、戦争の実態が現実認識として迫って来て、それまでの議論の空理空論では済まされない事態を身近に体験していて、既に無意識的にクッターとブルームハルト路線に大きく転換しつつあることを暗示する、役員会議長の発言である。バルトの三月中旬に経験した転換が当然彼個人の出来事で済まされるわけではなく、今やザーヘンヴィル村全体を揺るがす大きな動きとなって現われてきたと言うべきではなかろうか。

## 5 開戦一年後の「祈祷日」に立つ

一九一四年の「祈祷日」の説教もかなり特徴的なものであったが、一年後のこの日の説教は、一九一五年のバルトを理解するには、不可欠なものである、というべきである。九月第三日曜日の「祈祷日」に行く前に、二つの大きな山がある。一つはラガーツを回って、他の一つは

教会員への働き掛けである。先ずラガーツを回ってから始まる。

八月四日にトゥルナイゼンからバルトへの手紙<sup>(37)</sup>で、『新しい道』六月号掲載の「ラガーツ、ブルンナーの往復書簡」<sup>(38)</sup>について、バルトがそれをどう読むかと問いかけている。

最後に、『新しい道』誌上のラガーツ、ブルンナー往復書簡についての、あなたの感想を聞くことに、わたしは興味をもっています。

この往復書簡とは、一九一五年の『新しい道』六月号に掲載された「神の国とこの世の国について」(“Von Gottesreich und Weltreich”)を指している。このトゥルナイゼンの問い掛けに答え、八月六日の手紙<sup>(39)</sup>でバルトは「昨晚ラガーツの論文を初めてじっくり読みとても啓発された」と告げ、次いで内容に触れ、結論部分で決定的な懐いを伝えている。

啓発されたという意味は、ブルームハルトとクッターに比べて、ラガーツに欠けているものを、ラガーツがはっきりさせている点です。『神認識』『回心』神の国を『待つ』について何の言葉もなく、ただ神の国を『代表する』ことが無前提にあるのです。

要するに、わたしがこのラガーツの皇教座宣言を読んだとき、直ぐにわたしがクッターを識ったことをとても喜びました。あなたはわたしにクッターへの道を本来的に開いてくれました。これは本当です！一時『新しい道』誌の中に迷い込んだ袋小路が、今、わたしにはその危険がどのようなものであるか、がはっきりして来ました。そして、ラガーツに対抗して、事実に即して堅く留まることに、役立つことになるでしょう。

ここでバルトは、再度友トゥルナイゼンに、心からの感謝の言葉を述べている。同年三月半ばまでバルトはラガーツ路線に立って、友トゥルナイゼンのクッター路線を攻撃していたのであった。その迷路の中から直接にバルトを引き出したわけではないが、この友の反対発言で、ラガーツ及び『新しい道』から離れることが出来た、のは確かなことである。

次いでザーヘンヴィルの教会員に対する啓蒙活動について取り上げる。バルトは同じテキストで何回も別の説教を作ることをしてきたが、この説教は特にその意図が明瞭である。八月二十九日から九月十二日までの出エジプト記十七章八節―十五節にもとづく三説教<sup>(40)</sup>

八月末から九月に及ぶ、出エジプト記十七章八節―十五節をテキストにした、この「アマレク人との戦い」の三回に及ぶ説教は、遂に「役員会」で説教問題が取り上げられ、今後のザーヘンヴィル伝道を考慮に入れた話題が、役員会で真剣に語られるようになった。九月八日のバルトからトゥルナイゼンへ<sup>(41)</sup>の手紙には、「モーセに関する二回目の説教を『思慮深く』《tiefsinnig》と言う教会役員会議長の忠告に従って、語ったつもりです」と伝えている。話題に

なったその二回目の「アマレク人との戦い」を取り上げてみよう。

誰がアマレク戦闘を決め、良き終結に導いたのか。緊張の中で終日戦った勇敢なヨシュアと彼の軍隊なのか。然り。しかしながら勝利と征服は彼らによるのではなく、一人の老人（モーセ）によるのである。

わたしたちはアマレク戦闘でのモーセとその祈りについて、モーセがただひとりで丘の頂きに居ただけでなく、アロンとフルがモーセと共にいった、と読む。しかしこのことは決して偶然ではない。モーセは彼ら二人をととても必要としたのである。もしこの勇敢な誠実な伴侶なしでは、モーセはあのモーセではなかったであろう。

この説教は強く長いので、バルトの想いがよくでていところに絞って引用してみよう。

ああ、あなたが考え、感じるならば、これはわたしの場合である。あなたが真剣に関わることなのだ。その時深いところからあなたはアロンとフルを見出さなければならないし、見出すであろう。最高に理解する人間と友人が、あなたを信頼し、あなたを助けることなのである。『わたしを誰も理解しない、だから一人であるほうが好きだ、わたしの心中に起こっていることを誰にも告げない！』と、あなたは自分に誇っているながら、しかもとても愚かな懐いを抱いて閉じ籠もることから、一切を始めてはならない。それは駄目なのだ！あなたが持つはずの全ての内面の喜びと悟りがあなたを助けるのを、見よ。そしてそれがもし神の最も深い啓示であったならば、それがあなたを助ける。

結論部分でバルトは具体的な生活に結びつく話題に及ぶ。これが役員会に衝撃を与えた。

わたしたちがもう一度新しいことを始めるために他の人々を越えて行く一つのチャンスを持っている。最初にわたしは、一人の男性を、或いは一人の女性を持つ全ての人を思い起している。あなたたちの結婚が単なる家庭保持の共同体から霊の交わりへと移行できるかどうかを一度よく注目しなさい。もしあなたが正しく注目したいならば、あなたは、あなたが正に生涯誠実を約束したこの人に、あなたのモーセかあなたのアロンを発見できるかどうか、あなた自身に問いなさい。あなたがたは恐らく、愛と誠実が本来何であるかを、全く新たに経験することになるであろう。

わたしはまたわたしたちの教会生活を思い起す。ここでのわたしたちの集いと、牧師であるわたしとあなたたち教会員の関係を思い起す。わたしたちは本来的に一緒に何を願っているのだろうか。わたしたちは真剣に、ここで祝福と勝利の泉が、わたしたちに開かれることを願っているだろうか。そのことがわたしたちに、わたしたちの生活にあって、わたしたちの

村にあって、神の国の到来について聞き識るために何かをすることが真剣の中になされるべきなのか。それならばわたしたちはより深く、より正直な相互の交わりに入らなければならない。さらに真実に、さらに理解を持って、さらに誠実にならなければならない。わたしたちは事に当たる時、わたしたちはもっともとお互いに苦楽を分かつことができ、お互いのために行動することができたならば、と、わたしは自分自身に語り、あなたがたに語る。わたしたちは(今迄とは)全く違って、他人と一緒にまた他人のために信じることができたら、祈ることができたらと願う。

九月八日のバルト発信トゥルナイゼン宛<sup>(42)</sup>の先に引用したこの手紙の後半に、親しかったマールブルグのラーデについて報じ、彼との関係が冷えてしまった様子を示している。

ラーデは本当にわたしに会いたくないのです。彼は『わたしの意図にとっても関心を持っています。わたしが彼の意見に歩調を合わせない』という恨みを持っているでしょう。そしてそれ以上に、わたしたち三人に『不機嫌』なのです。何故なら、わたしたちがマールブルグの結婚式の後、ボルに行くためにとても急いで去ってしまったからです。

一九〇八年以来恩師として仰いできた人間関係が、戦争をきっかけとして、この半年の間に全く変わってしまったことを告げている。原因の一つとしてドイツ旅行があげられているが、「平和」論を巡ってもラーデの応えられない難問をバルトは更に突き付けていた。

九月九日のザーヘンヴィルの教会役員会記録<sup>(43)</sup>には説教「アマレクとの戦い」について、

シェレー氏が先週(九月五日)の説教に関する質問を発することにより、教会の業の目的についての対話が始まる。役員会書記(バルト)は同様の問題提起と対話の継続を求めた。

との一九一五年九月九日のザーヘンヴィル教会の役員会記録が残っている。更にトゥルナイゼン宛の手紙にも、バルトが同役員会の様子を伝える文章が見いだされる。(九月十日)

九月十九日の午前と午後の祈祷日の二つの説教<sup>(44)</sup>とバルトからトゥルナイゼンへの手紙<sup>(45)</sup>

この手紙の冒頭で、バルトは特別な懐いをトゥルナイゼンに伝えたい、と告白している。

さてあなたへの手紙を以て、この祈祷日を意味深く閉じたいとわたしは思っています。

同年の九月第三日曜日の祈祷日の、午前と、午後の二回の説教は、何れも「罪の許し」をテーマにしているのをトゥルナイゼンに告げ、「お前(Du)が私自身に向けられていたかのように非常に強く迫ってきました」と、バルト自身の上に大きな変化が生じたことを告白している。午前の説教と午後の説教の一部を紹介する。

先ず午前の説教の中から当時のバルトの想いを最もよく伝える文章を引用してみよう。

この戦争の年が、わたしたちの民族のためのより大きな決定的な洞察の時になり得た。新しい思想と決意の時になり得た。芽生えつつある実りの最初の手掛りを集める種蒔きの時になり得た。わたしたちが今この一年間に、全く偉大な何かを体験し、神と取り組み、神から何かを受け取ったことを振り返ることが許されることが、あり得たのだ。丁度イスラエル人が、奴隷を解放する五十年目の年を「主の恵みの年」と呼んだように（レビ記二二章八節一五五節、イザヤ書六一章一節以下）、わたしたちにとってこの過ぎ去った一年は「主の恵みの年」となることが出来た筈であった。

しかしこのことは未だ起こっていない。わたしたちの民族の多数、大多数は特別なことを体験していない。周りの国々での戦争は、わたしたちにとっては、きわめて表面的、外面的に触れるだけである。わたしたちは『戦争の只中にあっても、戦争にもかかわらず、全体として中立であり続けた』と全く冷静に言いたいのである。

（周囲の国々の）かの地で、神は審判と約束の誤解の恐れのない言葉を語っているが、しかしわたしたちは繰り返しわたしたちの声だけ聞いていたのに過ぎない。そして人々とか新聞のおしゃべりを聞いているだけである。かの地では、わたしたちの永年の慣れ親しんだ金銭欲と自己追求の世界に対して、非常に大きな、消しがたい疑問符が投げ掛けられてきた。しかしわたしたちは他人が存在していないかのように、この世の中で従来通り、心の満足の中に暮らしてきた。かの地では、数百万の人々が生活を犠牲にし、彼らの生活よりもっと大切にしているもののために数百万の人々が犠牲になっていた。しかしわたしたちはそれを必要としていない。何も犠牲にしないで、わたしたちの小さな生活は、戦争などは全然起こっていないかのように、わたしたちの口喧嘩と噂話と村騒ぎの中で、楽しく今迄通りに暮らしてきた。かの地では今、全ての国々は、その運命により一つの鉄のような意志に向かって、一緒に鍛えられてきた。

そして今わたしたちは、今日再び祈祷日を迎えている。この一年間の危険についての思いを振り返り、世界的事件の印象が当時よりもかなり弱まってきているとの違いを伴っているだけである。さて今はどうであろうか。今日は当時よりはより真剣になっていると受け取るべきか。あなたたちスイス人よ、「感謝せよ、悔い改めよ、祈りなさい！」と、わたしは今何かもう一度全教会に向かって、呼び掛けるべきだろうか。あなたがたはこの一年の間起こったことに神の声そのものを聞かなかつた後で、牧師の声を聞きたいし、聞くことができるかのように、起きなかつたことに気付かなかつたのは、わたし一人であるかのように。

わたしの為したことを、わたしから期待するな。わたしがあなたたちに語ることが出来ること全てを、あなたたちはこの年の経験に従って、自分で語ることが出来るのに、あなたたちはそれを願わないのだ。神の恵みを、たとえあなた方がそれを見たくないのにもかかわらず、あなた方に押しつけるためにわたしはしているのではない。

わたしたちの中の誰も実現してこなかったように、わたしたちがこの祈祷の一年全部を全然利用しないまま誤魔化してきているとの、わたしの観測に従って説明しても、何事もなかったかのようにしているとすれば、今日ふたたびあなたたちと祈祷日を一緒に祝うことは、わたしには断然出来ないことなのだ。

バルトが当日の午後の説教を、多くの教会員に聞いてもらいたいとの思いを抱いていたこととその結果について、その夜就寝前に書いたと思われるトゥルナイゼン宛の手紙が告げている。

考えてご覧なさい、今日わたしは二回目の説教の前に外を眺めて、ザーヘンヴィルの人々がもう一度教会には来ないで、夏の陽射しの中を楽しげに散歩に出かけるのを見ました。わたしは理屈では彼らの気持ちはよくわかるのですが、彼らは罪人について、また天国の喜びについての、神の言葉を聞くべきです。

説教の結果について、バルトとしては珍しいことを友トゥルナイゼンに伝えている。

わたしは今日、明白な印象をもって説教しました。すなわち、なにか特別なことが起こったことに気付いて、あちらこちらで若干の人々がひどく驚いて頭を上げていました。もちろん全員に及ぶことはありませんでしたが。

この祈祷日の午後の説教は、特別に念入りに書かれていて、詳しい内容を伝えたいが、ここでは特にバルトの自己告白的要素の強いものに限って紹介したい。

そうだ！ 今、今こそわたしは初めて神にたどり着けた。わたしがひとりの罪人になる前、何をわたしは神について知り、信じていたのか。それは空しかった、それは完全に見せ掛けであり、欺瞞であった。わたしがひとりの罪人になる前は、神の愛、赦し、平和、祝福、神の国とその支配が、何を意味していたかを、わたしは知らなかった。

たしかにこれらの言葉を聞いてはいたが、事柄を理解していなかった。わたしが罪人であるうとしない限りは、わたしの神は一つの小さな、無意味な、遠くの神であって、わたしを助けることのない、一つの神であった。わたしがひとりの正しい人間であって、ひとりの罪人でない限りは、わたしは神を知らなかった。わたしは神と共に思い切って行動しなかった。わたしのためにも他人のためにも祈ることをしなかった。わたしは神を信じていなかった。



今わたしはひとりの罪人になって、わたしは神を理解し、把握することを始めた。今この神についての大きな言葉が、わたしのために意味を持つようになった。神に関する何かを聞き知り、神が本来何を欲しているかを知り始めた。素晴らしい一日の早朝に立つように、わたしは立っている。アー、神はわたしに全てをもたらし給う。今どんなに明るくなり、素晴らしくなったことだろう。

先ずわたしは魂の最も深いところに、そして他の存在をそこに引き込んでくる。神の義がわたしを自由にしてくれ、力を伴ってくる。その時、思考において、謙遜と良心にあって明るくなる。何か楽しいこと明るいこと、決まったことが、そこに引き込まれる。今、人生が意味を受け取り、そしてその意味とは、わたしと全被造物にとって、勝利、超克、上昇、突破であり、それへと道は繋がるのである。

この祈禱日の午後の説教で語られた事柄は、第一次世界大戦開戦以来一年間バルトが多くの先輩、同僚、教会員と共に対話を進めてきた細い道の全ては、ここへの道であったことを示している。「クッター開眼」もそのための一里塚に過ぎなかった。ブルームハルトが既に歩んでいた道かもしれないが、バルト自身がこの道を発見できたことが、一九一五年を際立った年にすることが、ここで示されている。しかも手紙に報じているように、ザーヘンヴィルの教会員と一緒に巻き込んで、この道は開けているのである。

## 6 結びに替えて—先行研究に対する本論文の果たす意味—

一九一五年におけるバルトの言動を仔細に追跡してきたが、今迄日本にあってこの時期を取り上げた二つの先行研究に対する批判をもって結びに代えたい。出版された年の順序に従って取り上げることにする。

まず一九八二年出版の、金井新二著『「神の国」思想の現代的展開<sup>(46)</sup>』を取り上げる。【第三部 宗教社会主義から弁証法神学へ】《第三章 「神の国」の此岸性と彼岸性 一宗教社会主義者としてのK・バルト》の「運動を問う者」にあって次のように述べる。

バルトはザーヘンヴィル赴任と同時に、トゥルナイゼンを介して、クッターを知り、その思想に強く惹かれただけでなく、新たな「開眼」を経験したと思われる。そしてその後一貫してクッターの影響を受けつづけたのである。

この叙述は本論文の主張と同じである。しかしこのクッターの影響を受ける契機と時期については一切触れていない。引用文献の中には Kutter: Ich kann mir nicht helfen..., も掲載されているが、この論文の果たした役割については、クッターのラガーツ批判の面についてだけ取り上げているに過ぎない。金井はバルト発信トゥルナイゼン宛の、次の手紙に気付いていない。

一九一五年三月一八日。(47)

愛する友！ クッターは、わたし自身でも直接に感じているところなのですが、考慮すべきことをわたしに教えてくれました。ここで問題としていることは、「わたしたち」(スイス人)にとっては運命的なことです。しかもクッターが「少なくとも肝に命じて無心でわたしの本心を語りたい」と書いているので、救われます。

ここで話題になっている文書こそ “Ich kann mir nicht helfen" なのである。バルトはこの書物を読んで大きな衝撃を受け、トゥルナイゼンに手紙を書くとともに、著者クッター宛に手紙を出している。クッター宛の手紙は紛失したが、それに対するクッター発信の返事が残っている。一九一五年三月一九日。(48)

愛する牧師殿。あなたの手紙にわたしはとても感謝しています。もし献本がもっと多く入手できたならば、わたしは小冊子の一冊をあなたのところにも贈れたのですが、残念です！願わくは、スキャンダルが惹き起こらないようにと、祈っています。わたしたち(スイス人)共通の罪責についてだけ語り、形だけで (pro forma) 自分たちのことを計算に入れられないようなことのないようにと、わたしは自分では自覚しています。

この二通の手紙は、バルトがクッターのこの文書によって開眼したことを、告げている。金井が先に漠然と述べる「新たな開眼」が、この時、この文書に当ることを指摘したい。

次に取り上げる先行研究は、大崎節郎著『カール・バルトのローマ書研究』(49) である。《第四部 倫理学の構造 第二章 隣人愛》で次のように述べている。一九八七年出版。

一九一四年におけるあの経験の後、特に一九一五年、H・バーダー牧師を中心とするグループの会合がもたれるに至った頃より、バルトは、一方ではL・ラガーツらの実践に心惹かれつつも、宗教社会主義への批判を次第に強かつ公然と表明するようになり、H・クッターの問題にした「生ける神の問題」(Frage des lebendigen Gott) こそ本来の問題であると考え、さらにブルームハルト父子への関心をいよいよ深くしていった。

この文章で述べられていることに触れてどうしても引用しなければならないバルトの手紙がある。それは先の金井の場合に引用した手紙の後半である。一九一五年三月一八日。(50)

ところで、君はマールブルグに行きますね。ナウマンも来るでしょう。そこで君は「わたしたちは生ける神を証しする」“wir zeugen vom...lebendigen Gott” のに失敗することのないようにしましょう。帰りにわたしたちは日曜日にかけてボルに行こうと計画しています。君も一緒に行きませんか！

この手紙の前半で、クッター開眼を告げた上で、後半に「ボル」訪問を提案していることに注目すべきである。バルトには、クッター路線には当然ブルームハルトが浮かんでいたのである。この計画はこの提案通りに実施された。これは四月のことである。先の大崎の言う「パーダー牧師を中心とするグループの会合」は、同年の九月のことであった故、時期的には、「生ける神の問題」が惹き起こったのは、この手紙に示された三月十八日以来のことでなければならないであろう。

## Bibliographie

- (1) Karl Barth : *“Predigten 1915”* 1996 T.V.Z.
- (2) Karl Barth : *“Karl Barth - Eduard Thurneysen Briefwechsel”* Band 1.1913-1921 1973 T.V.Z.
- (3) Karl Barth : *“Karl Barth - Martin Rade Ein Briefwechsel”* 1981 Gütersloer
- (4) Hermann Kutter : *“Hermann Kutter in seinen Briefen 1883-1931”* 1983 C.Kaiser
- (5) Leonhard Ragaz : *“Leonhard Ragaz in seinen Briefen 2.Band 1914-1932”* 1982 T.V.Z.
- (6) *“Karl Barth - Martin Rade Ein Briefwechsel”* S.122
- (7) *ibid.* S.123
- (8) *“Predigten 1915”* S.12-22
- (9) *“Karl Barth - Eduard Thurneysen Briefwechsel”* S.24-27
- (10) *ibid* S.30
- (11) Karl Barth : Ein Vortrag *“Krieg, Sozialismus und Christentum”* gehalten in Schulhaus Küngoldingen am 6.12.1914 und in Zofingen am 12.2.1915 Amgebotene von *“Karl Barth Archiv”* in Basel
- (12) *“Predigten 1915”* S.79-141
- (13) *“Karl Barth - Eduard Thurneysen Briefwechsel”* S.32-34
- (14) *“Leonhard Ragaz in seinen Briefen”* S.72/73
- (15) 浜辺達男 : 「スイス宗教社会主義派指導者クッター, ラガーツを巡るバルト, トウルナイゼン間の論争」一九九三年度 東洋英和女学院大学 人文・社会科学論集 7
- (16) *“Karl Barth - Eduard Thurneysen Briefwechsel”* S.35
- (17) 浜辺達男 : 「スイス宗教・社会主義 (バルト, ラガーツ, クッター) のドイツの友への言葉」一九九三年度 東洋英和女学院大学 人文・社会科学論集 8
- (18) Hermann Kutter : *“Ich kann mir nicht helfen...” Auch ein Wort an die deutschen Freude der Religiös=Sozialen.* 1915 Drell Füßli Zürich
- (19) *“Predigten 1915”* S.110-120
- (20) *“Karl Barth - Eduard Thurneysen Briefwechsel”* S.36
- (21) *“Predigten 1915”* S.121-131
- (22) *ibid* S.132-141
- (23) *ibid* S.142-150
- (24) *ibid.* S.151-161
- (25) *“Karl Barth - Martin Rade Ein Briefwechsel”* S.130/131
- (26) *“Karl Barth - Eduard Thurneysen Briefwechsel”* S.39

- (27) *ibid.* S.42
- (28) Karl Barth : “Friede” in “Glocke” Jahrg. XXIII, Nr.9. Juli 1915 Monatliches Organ des Christl. Vereins junger Männer Zürich
- (29) 浜辺達男：「第一次世界大戦の渦中におけるカール・バルトの『平和』論」 一九九五年度 東洋英和女学院大学 人文・社会科学論集 10
- (30) “Karl Barth - Eduard Thurneysen Briefwechsel” S.30
- (31) *ibid.* S.50
- (32) 註 29
- (33) “Predigten 1915” S.227-259
- (34) “Karl Barth - Eduard Thurneysen Briefwechsel” S.52
- (35) *ibid.* S.60
- (36) *ibid.* S.61/62
- (37) *ibid.* S.68
- (38) Emil Brunner u. Leonhard Ragaz: “Von Gottesreich und Weltreich” in “Neue Wege” 6. 9.J. 1915
- (39) “Karl Barth - Eduard Thurneysen Briefwechsel” S.69/70
- (40) “Predigten 1915” S.345-377
- (41) *ibid.* S.366
- (42) “Karl Barth-Eduard Thurneysen Briefwechsel” S.78
- (43) “Predigten 1915” S.366 脚註
- (44) “Predigten 1915” S.378-398
- (45) “Karl Barth - Eduard Thurneysen Briefwechsel” S.82/83
- (46) 金井新二『「神の国」思想の現代的展開』一九八二年 教文館 253 頁
- (47) “Karl Barth - Eduard Thurneysen Briefwechsel” S.35
- (48) “Hermann Kutter in seinen Briefen” S.314
- (49) 大崎節郎『カール・バルトのローマ書研究』一九八七年 新教出版社 383 頁
- (50) “Karl Barth - Eduard Thurneysen Briefwechsel” S.36

**“Zusammenfassung”**

## ***Karl Barth im Jahre 1915***

Tatsuo Hamabe

Es ist für mich eine große Freude, daß “Predigten 1915” als ein Buch von K.Barth Gesamtausgabe 1996 in die Welt gekommen ist. Wir konnten schon “Karl Barth -Eduard Thurneysen Briefwechsel”, “Karl Barth - Martin Rade Ein Briefwechsel”, “Hermann Kutter in seinen Briefen” und “Leonhard Ragaz in seinen Briefen” lesen. Veranlaßt durch diese Bücher habe ich die Artikel geschrieben: “Der Gedankenaustausch zwischen K.Barth und E.Thurneysen über die beiden Leiter der religiös=sozialen Bewegung der Schweiz, Hermann Kutter und Leonhard Ragaz”, “Eine geistliche Wende Karl Barths im März und April 1915” und “Ein Artikel ⟨Friede⟩ von Karl Barth in der Zeit des ersten Weltkrieges”.

Aber bisher hat mir noch das Buch “Predigten 1915” von Karl Barth gefehlt. Ohne das konnte ich nicht weiter gehen. Herzlich danke ich den Herausgebern für den Abdruck dieses Buches.

Für Karl Barth begann das Neujahr 1915 mit dem ⟨Rade-Fest⟩. M.Rade besuchte vom 3.-5.1. 1915 die Schweiz. In Bern gab es einen Austausch mit schweizerischen, vor allem religiös-sozialen Theologen. Vom 4. auf den 5.1. übernachtete Rade in Safenwil. Daraus kam eine Predigt von Karl Barth am 10.1. heraus. Er sagte dort ⟨eine neue Welt⟩ : ⟨Und so ist's nicht nur unserem Christentum gegangen, sondern ebenso all den Bestrebungen und Bewegungen, die die Menschen im Namen der Menschlichkeit und des Fortschritts und der Freiheit unternommen hatten.... Wir hatten alle jene Bewegungen und Parteien, die unter dem Zeichen des Fortschritts standen.... Buße tun heißt, sich von Gott umwenden lassen.... Die neue Welt ist da.⟩ ⟨In ihm erkennen wir, daß die bisherige Welt und wir bisherigen Menschen gerichtet und überwunden sind, und in ihm tritt zugleich die neue Welt und der neue Mensch als greifbare Wahrheit in unser Leben hinein.⟩

Ein Brief von Eduard Thurneysen an Karl Barth sagt uns folgendes: ⟨In deinem Blaukreuzver in und erst noch vor dir und deinem Bruder Heiner zu reden, fällt mir nicht leicht. Ich habe vor, über ⟨Seitenwege⟩ etwas zu sagen,...⟩ 25.2.1915. Nachdem der Blaukreuzverein in Safenwil am 28.2. stattgefunden hatte, schrieb K.Barth an Eduard Thurneysen am 8.3. ⟨und daß du mich vor den “Neuen Wegen” hast warnen wollen, dafür solltest du eigentlich zur Strafe sofort einen feinen Artikel hineinschreiben über das alles!⟩

Darauf reagierte Eduard Thurneysen sofort und antwortete Karl Barth am 9.3.: 《ich bin allerdings der Meinung, in der Differenz Kutter-Ragaz verberge sich mehr als nur ein Unterschied der Nuance. Ich denke, es liege ein sachlicher Gegensatz vor.》

In dieser Zeit erschien Kutters Publikation: “Ich kann mir nicht helfen.” 1915. Dieses Büchlein gab Karl Barth 《sehr zu denken》. Barth sagte in seinem Brief am 18.3. an Eduard Thurneysen: 《Kutter gibt mir doch sehr zu denken, weil ich mich auch betroffen fühle. *Es ist fatal für “uns”, ...*》 In Büchlein Kutters stand der Satz: 《Wir Schweizer haben es gut. Die großen religiösen, sozialen, freiheitlichen und fortschrittlichen Ideen regnen uns nur so in Studierstube und Tintenfaß herein, daß wir fast nicht anders können, wenn wir schreiben, als uns zu ihren Herolden zu machen, wenn wir auch im täglichen Leben.》 Für Karl Barth bedeutete “für uns” “Wir Schweizer” im Satz von Kutter.

Nach Kutters Meinung gab es eine gewisse Gruppe religiös=sozial Gesinnter in der Schweiz. Diese Gruppe sagte wunderliche und seltsame Stilblüten an die deutschen Freunde. Etwa Mitte März 1915 las Karl Barth Kutters Büchlein, bekam einen großen Schreck und schrieb an Kutter. Leider ging der Brief selbst verloren. Aber glücklicherweise ist die Antwort Kutters an Barth erhalten geblieben.

《Besten Dank für Ihre Zeilen. Ich hätte Ihnen gerne auch ein Exemplar meines Büchleins geschickt, wenn ich noch Freixemplare bekommen hätte ! 》

Das Hauptthema Kutters Büchlein war der “Pharisäismus der Idee”. Kutter sagte in seinem Büchlein folgendes:《Alle Ideen sind im Grunde nichts anderes, als die wechselnde Ausdrucksform des einen unerschöpflichen göttlichen Lebens. Leben ist Alles. Gott ist das Wesen der Idee. Gott ist die Liebe, die Gerechtigkeit, der Friede, die Einheit.》《Friede heißt nichts anderes als die einigende Geistesmacht Gottes in den Menschen.》